

令和8年8月25日

クマ撃退スプレーの備え方 － 事前の確認・準備が必須です －

令和7年度のクマ¹の出没や被害が過去最多となり、また、令和8年度に入ってからクマの生息地である山林内での人身被害に留まらず、これまでクマの目撃がなかった市街地でも出没が増加するなど、近年、多くの地域でクマが人の生活圏に侵入しています。クマによる人身被害を防ぐためには、クマに出会わないようにすることが最も重要ですが、クマに出会ってしまったためのために、クマ撃退スプレーを備えることは有効な対策の一つです。一方で、クマ撃退スプレーは、適切に使用することでクマの撃退に一定の効果を期待できる製品ですが、消費者庁、環境省、独立行政法人国民生活センターが共同で行ったテストから、噴射距離や噴射時間などが製品により異なることが確認できました。

また、刺激物質を含むため、取扱いに注意が必要な製品でもあり、適切に保管・使用しなければ自身や周囲の人に被害が生じる可能性もあります。

今回は、クマ撃退スプレーの特徴やテスト結果とともに、製品を選ぶ、保管・使用などする際のポイントをご紹介します。



【選ぶ際のポイント】

- ・クマ用、かつ、撃退用のスプレーを選ぶ
- ・表示をよく確認し、購入する

【保管・持ち運びなどのポイント】

- ・安全装置は必要なとき以外は外さない
- ・高温になる場所に置かない
- ・こどもの手の届く場所に置かない
- ・必要なとき以外は持ち歩かない、人の多い場所では取り出さない
- ・航空機に持ち込むことはできない
- ・中身をカラにしてから、自治体のルールに従って捨てる
- ・皮膚や目に付着したら大量の水で洗い流す

【使用する際のポイント】

- ・事前に使い方を確認し、すぐに噴射できるように身に着け、適切に使用する
- ・人、テントや荷物などに吹きかけない

なお、クマに出会わないための行動を心掛けることが、人身被害防止の第一歩です。

¹ 本資料中において、ヒグマ及びツキノワグマを指します。

1. クマの出没状況、人身被害状況などについて

令和7年度におけるクマの出没情報数、人身被害者数、死亡者数は環境省が集計を開始して以降、過去最多となりました。

令和8年度においても出没情報数は多く、死亡事故も発生しています（図1、2）。

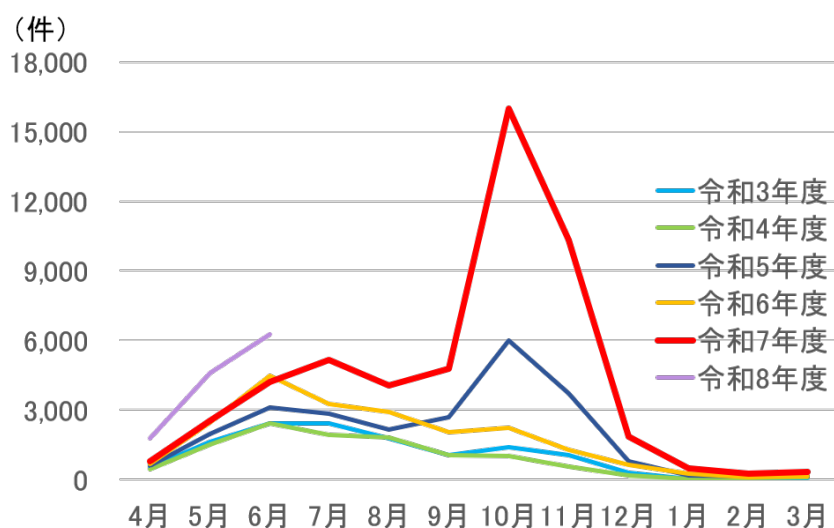


図1 出没情報数（北海道以外の都府県の合計）

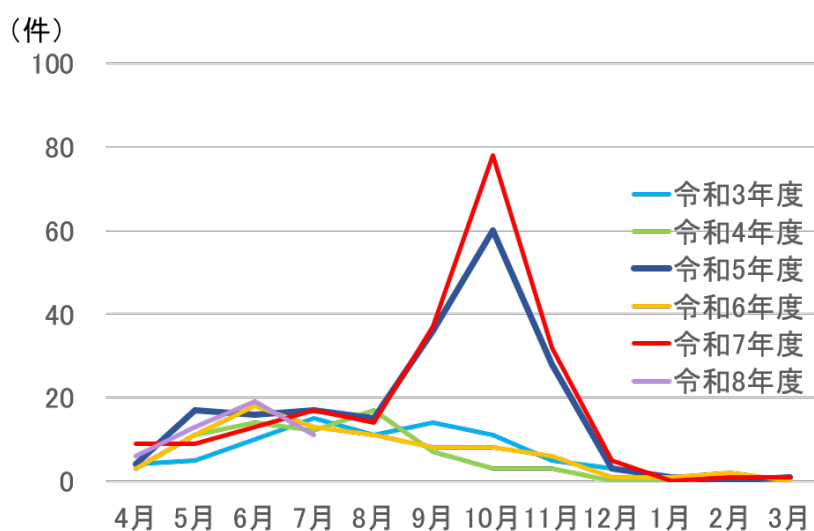


図2 人身被害件数（死亡事故含む）（全都道府県の合計）

2. クマ撃退スプレーについて

国内では「クマスプレー」や「クマ避けスプレー」など、様々な名称の製品が様々な目的で販売されていますが、本資料でいう「クマ撃退スプレー」とは、トウガラシの辛味成分



であるカプサイシンなどのカプサイシノイド²を主成分とし、クマとの近距離での遭遇時において、クマの顔面（目、鼻）に噴射することにより、クマの攻撃や接近など、人にとって望ましくない行動を一時的に抑止するためのスプレー製品を指します。

クマの行動の抑止に有効な成分であるカプサイシノイドと噴射用のガスなどを容器に充てんしており、一般に、安全装置を解除し、レバーやボタンを押すことで、噴射孔からガスとともに有効成分が噴射される仕組みです。

（１）噴射機構（アクチュエーター）及び安全装置

噴射機構（アクチュエーター）にはトリガー式やボタン式のものがあります（図３）。



図3 噴射機構（アクチュエーター）の例（イメージ）

また、持ち歩く際や保管する際の誤噴射を防ぐための安全装置が付いており、セーフティクリップによるものやキャップによるものなど複数のタイプがあります³（図４）。

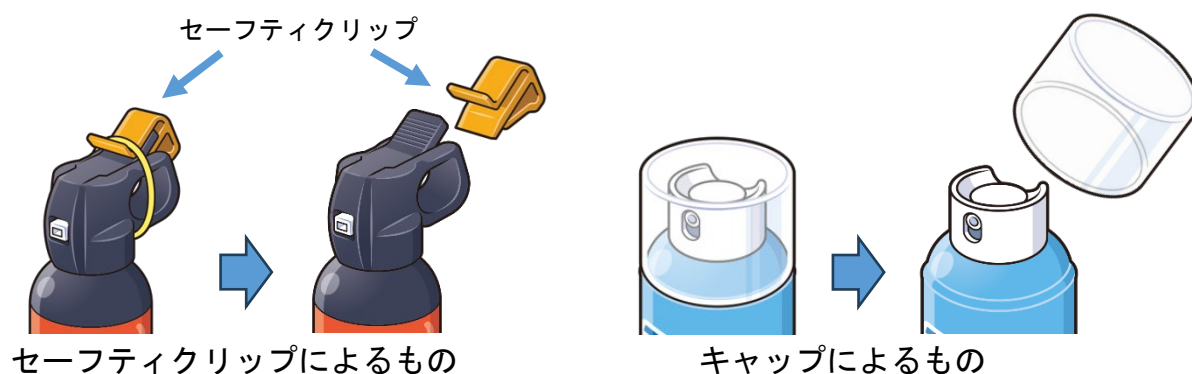


図4 安全装置の例（イメージ）

² カプサイシンとは、トウガラシなどに含まれ辛味をもたらすカプサイシノイドと呼ばれる天然の有機化合物の一つです。カプサイシノイドには、カプサイシンのほかにも、ジヒドロカプサイシンやノルジヒドロカプサイシンなどの10種以上の同族体があります。

³ 本資料では、製造者が安全装置としての意図をもって製造しているかどうかによらず、噴射機構（アクチュエーター）にあるレバーやボタンを操作できない状態にする装置や構造を安全装置と称します。

（２）持ち歩き方

クマへの噴射を素早く行うため、鞆の中などに入れておくのではなく、ホルダーやホルスターなどと称される携行用ケースを用いてすぐに取り出せるように身に付けておくことが重要です（図５）。ただし、人の多い場所や公共交通機関などでは、誤噴射などが起こらないよう、持ち歩く際には鞆の中などにしましょう。



図５ 携行用ケースを用いた身に着け方の例（イメージ）

３．クマ撃退スプレーに関するテスト結果について^４

（１）噴射性能について

クマ撃退スプレーとして販売されている 12 製品について噴射を伴うテスト（以下「噴射テスト」という。）を実施し、噴射距離、噴射時間、噴射パターン、内容量を測定しました（噴射テスト方法の詳細は、「別添 クマ撃退スプレーなど噴射テスト方法」に記載）。また、参考として対人用スプレー（対人用の催涙スプレー）３製品についても噴射テストを行いました。

クマ撃退スプレーの噴射距離については、最小のものは 3.5m、最大のものは 10m 以上でした（図 6）。噴射時間については、最小のものは約 2 秒、最大のものは約 37 秒でした（図 7）。噴射パターンについては、霧状のものが 6 製品、棒状のものが 3 製品、霧棒混在のものが 3 製品でした（図 8）。内容量については、最小のものは 40 g 程度、最大のものは 225 g 程度でした（図 9）。

^４ 結果の記載及び図 6 から図 12 までについては、本注意喚起のために行ったテストの結果であり、販売・流通しているクマ撃退スプレー全体の傾向を示すものではありません。

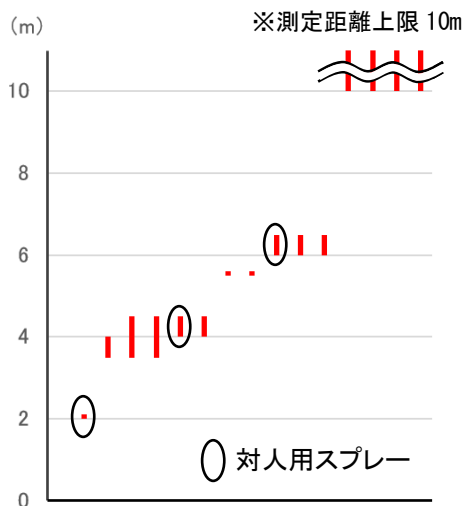


図6 噴射距離の結果 (n=15)

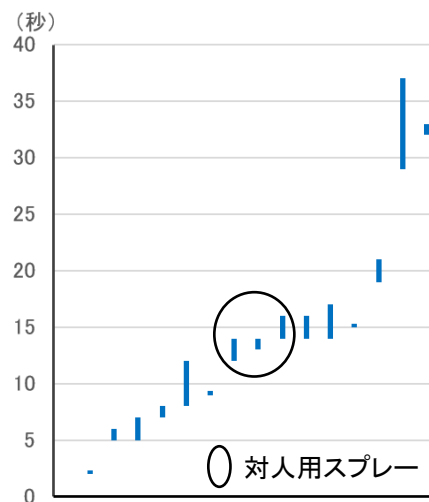


図7 噴射時間の結果 (n=15)

(図6、7とも各製品で3試料測定し、最小値と最大値を記載)

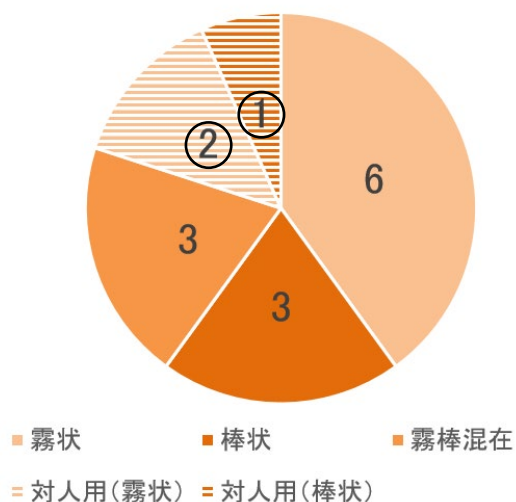


図8 噴射パターンの結果 (n=15)

(数値は製品数、○は対人用スプレー)

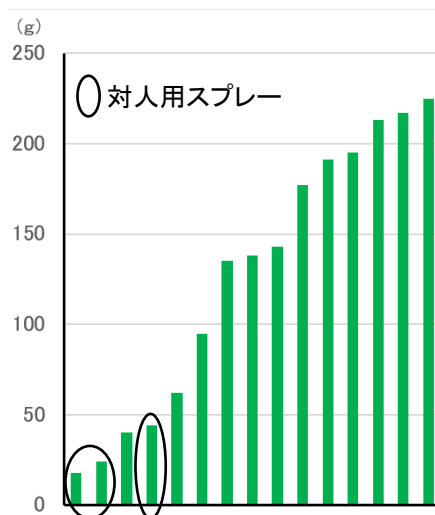


図9 内容量の結果 (n=15)

(各製品で3試料測定したうちの最小値)

(2) 表示及び構造について

クマ撃退スプレー12 製品の表示及び構造を確認しました。製品の有効成分については、カプサイシン（2%）やカプサイシノイド2.0%などの様々な表示方法が見られました（表1）⁵。

⁵ オレオレジン・カプシカム (Oleoresin Capsicum) とは、カプサイシンなどの辛味成分のほか、油脂や色素などを含んだトウガラシの抽出物を指します。辛味成分の強さはオレオレジン・カプシカムに含まれるカプサイシンなどの濃度によって決まるため、オレオレジン・カプシカムの量や濃度が同じであっても、辛味成分の強さが異なる場合があります。

カプサイシン（〇％）
カプサイシン〇％以上（カプサイシノイドを含む）
カプサイシンを含むカプサイシノイド〇％
カプサイシノイド〇％
カプサイシン・香辛料濃縮抽出物
〇％濃度のオレオレシン・カプシウム
天然オレオレシンカプシカム〇％
オレオレジンカプシカム

表 1 有効成分の表示

（同じ表示の製品があるため、製品数と一致しない。また、〇％の〇には数値が記載されていたもの。）

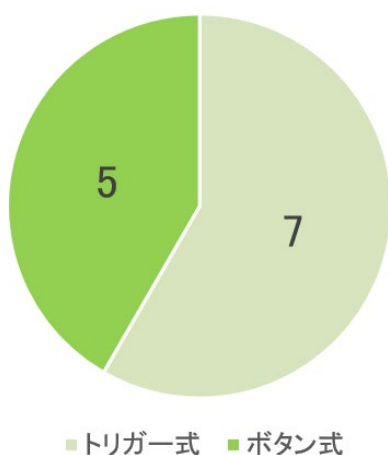


図 10 噴射機構（アクチュエーター）
の結果（n=12）（数値は製品数）

噴射機構（アクチュエーター）については、トリガー式のものが7製品、ボタン式のものが5製品でした（図 10）。噴射機構（アクチュエーター）に関しては、噴射孔の向きを目視などで確認する必要がない構造かどうか（例えば、グリップを持つと必然的に噴射孔の向きが決まる、ボタンの周囲にある凹凸構造により触れば噴射孔の向きが分かるなど）が、噴射を素早く行えるかを判断する上での重要なポイントになると考えられます。

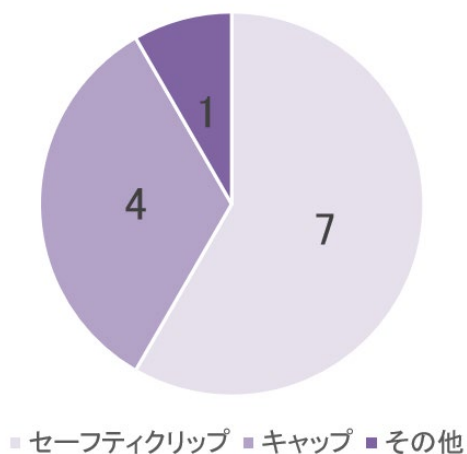


図 11 安全装置の結果（n=12）
（数値は製品数）

持ち歩く際や保管する際の誤噴射を防ぐための安全装置は、テストした全ての製品が有しており、セーフティクリップによるものが7製品、キャップによるものが4製品、その他の方法によるものが1製品でした（図 11）。なお、同様の形状であっても取り外しや解除する際の固さにも違いが感じられました。

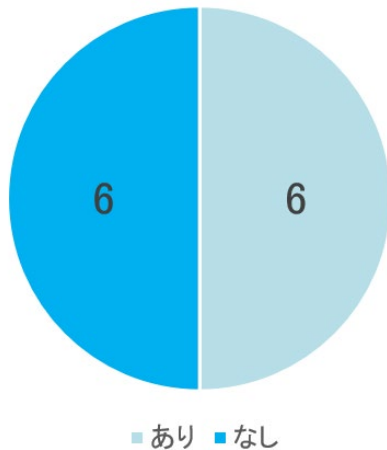


図 12 専用携行用ケースの有無の結果 (n=12) (数値は製品数)

専用携行用ケースについては、あるものが6製品、ないものが6製品でした(図 12)。クマ撃退スプレーは取り出しやすいように持ち運ぶ必要がありますが、携行用ケースが適切でないと、使用時や移動中の落下のリスクが懸念されます。各スプレー専用の携行用ケースは、対となるスプレーのサイズや使用方法を踏まえて作られているため、取り出す際に手間取ったり、移動中に落下させたりといったリスクを低減できると考えられます。

4. クマ撃退スプレーを選ぶ際の注意ポイント

(1) クマ用、かつ、撃退用のスプレーを選ぶ

クマ撃退スプレーのように見える製品の中には、対人用スプレーのようにクマを対象としていない製品をクマに対しても使用できるものとして販売しているものもあります。また、クマ忌避スプレーなどと呼ばれる、クマの行動の抑止が目的ではなく、対象物に事前に吹き付け、強い臭いなどによりクマを近づけさせないことを目的とした製品もあります。製品の表示などをよく確認し、クマの行動の抑止を目的とした製品を購入しましょう。

なお、クマ撃退スプレーは、クマを寄せ付けないための忌避剤ではありません。むしろ、海外での研究報告では、クマに対する抑止効果が認められたクマ撃退スプレーを地面に噴射した後に、クマが引き寄せられたことが確認されています。クマ撃退スプレーを人に吹きかけたり、テントや荷物などに吹きかけたりしないでください。

(2) 表示をよく確認した上で製品を購入する

噴射テストの結果からも分かるように、クマ撃退スプレーについては、噴射距離、噴射時間、噴射パターン、内容量、有効成分、噴射機構(アクチュエーター)の構造、安全装置、専用の携行用ケースの有無など様々な製品設計のものがああります。製品を購入する際には、使用する場所や場面を想定し、それを踏まえた製品を選択しましょう。

また、購入時には、製品本体、パッケージ、取扱説明書の表示を、インターネットの販売サイトで購入する場合は画面表示の内容もよく確認しましょう。特に販売サイトでは、噴射距離や噴射時間などの表示がないもの、有名な製品

の模造品やクマ撃退スプレーではない製品にクマの写真を合わせ紛らわしくなっているものなどもみられます。不明な情報を販売者に尋ねることなどとも合わせて、必要な情報が確認できる製品を購入しましょう。

なお、環境省が公表した「クマ撃退スプレーの性能に係る推奨要件（令和8年8月）」では、様々な状況下で人命を守るために必要と考えられる性能の推奨要件を取りまとめているため、製品を選択する際にご参照ください。

＜クマ撃退スプレーの性能に係る推奨要件の項目＞

- ①有効成分の表示方法と含有濃度
- ②噴射距離・噴射時間
- ③噴射パターン
- ④噴射機構（アクチュエーター）、安全装置
- ⑤使用期限
- ⑥製品表示、事業者が公表すべき事項

※詳細は以下の URL からチェック↓

<https://www.env.go.jp/nature/choju/effort/effort12/kuma-oshirase-r080825.html>

5. クマ撃退スプレーの保管、持ち運びなどに係る注意ポイント

クマ撃退スプレーは、刺激物質を含むため、取扱いに注意が必要な製品です。適切に保管・持ち運びをしなければ、いざ使用する際に正しく作動しなかったり、自身や周囲の人に被害が生じたりする可能性もあります。以下のような点に注意しましょう。

- ・ 安全装置は必要なとき以外は外さない、外した後はつけ直す
安全装置を外したままにしておくと、ふとしたはずみで誤噴射し、周囲に大きな被害が生じることにつながります。安全装置はクマと遭遇したときなど必要なとき以外は外さないようにしましょう。また、外した後でスプレーを使用しなかった場合は、忘れずに安全装置をつけ直すようにしましょう。
- ・ 高温になる場所に置かない
製品の破裂や劣化をさけるため、直射日光の下や火気の近く、車内など高温になる場所に長時間置かないようにしましょう。
- ・ こどもの手の届く場所に置かない
防虫スプレーや制汗スプレーなどのスプレーについては、こどもが誤って使用し目に入ったといった事故も起こっています。クマ撃退スプレーもスプレー製品であり、カプサイシンなど刺激物質を噴射するものであるため、こどもや愛玩動物（ペット）の手足の届く場所に置かないようにしましょう。

- ・ 必要なとき以外は持ち歩かない、人の多い場所では取り出さない
クマ撃退スプレーは、市街地や人の多い場所、公共交通機関で誤噴射や暴発などが発生すると周囲に大きな被害が生じる事態になり得ます。このため、必要なとき以外は持ち歩かず、持ち歩く際も人の多い場所、公共交通機関では極力取り出さないことが重要です。
- ・ 航空機に持ち込むことはできない
クマ撃退スプレーは、航空法により危険物として航空機への持込みや預入れが禁止されています⁶。なお、クマ撃退スプレーの貸出を行っている機関や事業者もありますので、活用も検討しましょう。
- ・ 中身をカラにしてから、自治体のルールに従って捨てる
廃棄する際は、中身を使い切ってから、お住まいの自治体のルールに従って捨てるようにしましょう。中身が残っている場合は、ゴム手袋、マスク、保護メガネ（ゴーグル）、雨具などにより肌を極力露出しないようにした上で、水を入れたバケツの中で噴射するなどしましょう。噴射後の水は下水に流すなどしてください。
- ・ 皮膚や目に付着したら大量の水で洗い流す
スプレーが皮膚、目、鼻や喉に付着した場合は、直ちに大量の水で洗い流してください。洗い流す際は、こすったりせず、痛みが引くまで流水を流し続けるようにしましょう。痛みが引かない場合など、必要に応じて、医療機関を受診しましょう。

<クマ撃退スプレーの誤噴射などの情報>

クマ撃退スプレーの誤噴射や誤認などについて、消費者庁には事故情報⁷（※1）が、全国の消費生活センターなどには相談情報⁸（※2）が寄せられています。

⁶ 機内への持込み又はお預け手荷物に制限がある品目の代表例（国土交通省）
<https://www.mlit.go.jp/common/001425421.pdf>

⁷ 関係機関から「事故情報」及び「危険情報」を広く収集し、事故防止に役立てるために、消費者庁が独立行政法人国民生活センターと連携して運用しているデータ収集・提供システムである事故情報データベース（平成22年4月運用開始）に寄せられた情報。なお、収集した情報には、事実関係及び因果関係が確認されていない事例も含まれます。

⁸ 独立行政法人国民生活センターと全国の消費生活センターなどをオンラインネットワークで結び、消費生活に関する相談情報を蓄積しているデータベースであるPIO-NET（パイオネット：全国消費生活情報ネットワークシステム）に寄せられた相談情報。消費生活センターなどからの経由相談は含まれていません。

【事例 1】

草刈り機を使用中に、落ちていたカプサイシン含有の熊よけスプレーに刃先が当たって缶が破裂し、内容物が顔面にかかった。顔面や両足の発赤、熱感や痛みがあり、水洗して救急搬送された。

（発生：令和 6 年、30 歳代、男性）※ 1

【事例 2】

大手 EC サイトで熊よけスプレーを購入した。庭でエプロンのポケットに入れていたところ、しゃがんだはずみにポケットから落ち、缶の側面に穴が空いて液体が噴出した。右腕や顔にかかり、腕はやけどと同じようにヒリヒリして痛くてたまらないので、皮膚科を受診した。

（受付：令和 7 年 9 月、40 歳代、女性）※ 2

【事例 3】

クマ撃退スプレーだと思って購入したが、効果が撃退ではなく忌避だった。

（受付：令和 6 年 8 月、60 歳代、男性）※ 2

【事例 4】

クマよけスプレーを室内で誤射し部屋中に広がってしまったが、約 9 か月経ってもひどい臭いが取れない。（受付：令和 3 年 7 月、60 歳代、男性）※ 2

6. クマ撃退スプレーを使用する際のポイント

クマ撃退スプレーを使用するのはクマが目の前にいる状況です。そのため、冷静な行動や判断をすることは非常に難しいと考えられます。以下の点も踏まえ、事前に操作方法などの確認や、実際の使用場面をイメージした操作練習をしておき、いざ使用する際には素早く、適切に使用することが重要です。

- ・ 取扱説明書を確認し、取扱説明書の内容に沿って使用する
- ・ 使用期限や有効期限の切れていない製品を使用する
- ・ 1～3 秒程度の噴射が複数回できるよう、原則、使いかけを使用しない
- ・ すぐに取り出して噴射できるように身に着ける
- ・ スプレーの噴射距離を考慮しながら、5～10m 程度クマとの距離を置いた状態で噴射する
- ・ 使用者自らがスプレーを浴びないように、原則として、クマよりも風上から使用する。風下では極力使用しない
- ・ クマの顔面（目、鼻）を狙って噴射する
- ・ 冬の低温時にはガス圧が低下し、噴射距離が短くなることに留意する
- ・ 事前にクマとの距離のイメージトレーニングや動画を見るなどして、操作方法の確認や噴射の練習を行う（練習用スプレーなどによる実射を推奨）
- ・ 人、テントや荷物などに吹きかけない

7. クマ撃退スプレーを使う前に、出会わないことが重要

クマによる被害を防ぐためには、まずクマに出会わないための行動を徹底することが重要であるとされています。

森林や山林部などのクマの生息域では、山菜・キノコ採りや登山、散策中の被害が多く発生しています。特に明け方や日没前後はクマの活動が活発になるため、この時間帯の入山を避けることが有効です。また、ラジオやクマ鈴を携行して音を鳴らし続けることで人の存在を知らせること、見通しの悪い場所では大きな声を出したり笛を吹くこと、単独行動を避けて複数人で行動することが推奨されています。さらに、自治体などが発信する出没情報を事前に確認することや、クマのフンや足跡、爪痕などの痕跡を発見した場合は速やかにその場を離れることが大切です。キャンプ場がクマの生息域にある場合は、絶対に食べ物を放置せず、フードコンテナや携帯式電気柵を活用するなど、クマを誘引しない対策も必要です。

一方、市街地、人家周辺、道路、農地など人が日常的に活動する場所である人の生活圏では、散歩やランニング、自宅周辺での日常生活での被害が最も多く発生しています。被害事例を見ると、放任果樹や農作物残さ、生ごみ、野外に置かれたペットフードなどの誘引物がクマを呼び寄せる大きな要因となっています。そのため、収穫しない果実の除去や生ごみ管理の徹底、電気柵の設置、農地や道路周辺の草刈りによる見通しの確保が重要です。また、出没情報がある場合は早朝や夕方の外出を控え、音の出るものを携行して人の存在を知らせることも有効です。

クマ撃退スプレーは、クマが目の前にいて回避できない状況で使用するものです。スプレーの仕組みや使用方法を事前に理解し、すぐ取り出せるように携行することが重要ですが、最も大切なのは遭遇そのものを防ぐことです。「クマを寄せ付けない」「クマに人の存在を知らせる」「クマとの出会いを避ける」という基本対策を徹底することで、多くの事故は未然に防ぐことができます。クマの生息域と人の生活圏それぞれの特徴を理解し、出会わないための行動を心掛けることが、人身被害防止の第一歩です。

8. 参考

○環境省 「クマに関する各種情報・取組」

(<https://www.env.go.jp/nature/choju/effort/effort12/effort12.html>)

○環境省 「国民向けのクマに関する情報」

(<https://www.env.go.jp/nature/choju/effort/effort12/kuma-info-citizen.html>)

○環境省自然環境局 令和8年8月「クマ撃退スプレーの性能に係る推奨要件」

(<https://www.env.go.jp/nature/choju/effort/effort12/kuma-oshirase-r080825.html>)

○環境省自然環境局野生生物課鳥獣保護管理室 令和8年3月「クマによる人身被害事例からクマに出会わないためにできることや出会ってしまった時の対処について」

(<https://www.env.go.jp/nature/choju/effort/effort12/kuma-bunseki-r0804.pdf>)

9. 参考動画・ポスター

消費者庁や独立行政法人国民生活センターでは、ウェブサイトで啓発用の動画及びポスターを公表していますので、ご活用ください。

消費者庁：

https://www.caa.go.jp/policies/policy/consumer_safety/caution/caution_087

(独) 国民生活センター：

https://www.kokusen.go.jp/news/data/n-20260825_1.html



参考動画



参考ポスター

<本件に関する問合せ先>

消費者庁消費者安全課

TEL：03（3507）8800（代表）

URL：<https://www.caa.go.jp>

環境省自然環境局市街地クマ出没対策チーム

（通称：アーバンベア対策チーム）

TEL：03（3581）3351（代表）

URL：<https://www.env.go.jp>

（独）国民生活センター 商品テスト部

TEL：042（758）3165

URL：<https://www.kokusen.go.jp>

別添 クマ撃退スプレーなど噴射テスト方法

クマ撃退スプレーなどの噴射を伴うテストは、幅約 10 m、奥行き約 14 m、高さ約 5 m のビニールハウス内で風の影響を受けないよう扉を閉めて行いました（図 13）。テストは令和 8 年 6 月 22 日及び 23 日に行い、テスト時の室温及び湿度は、それぞれ $25 \pm 5^{\circ}\text{C}$ 、 $60 \pm 15\%$ でした。

試料には、インターネットの通信販売の大手ショッピングモール上で「クマスプレー」で検索した際に上位に表示された製品の中から選定した 12 製品、対人用として販売されていた製品の中から選定した 3 製品の合計 15 製品を用いました。なお、表示及び構造調査は、クマ撃退スプレー 12 製品について行いました。

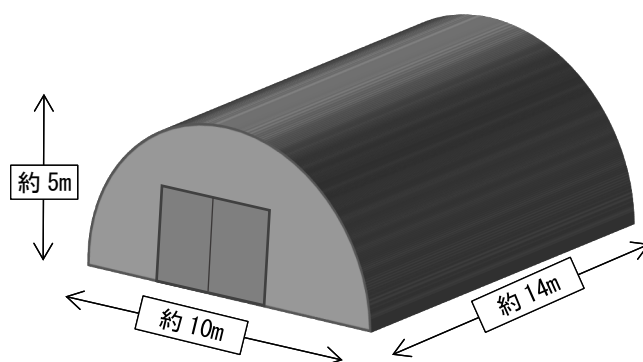


図 13 噴射テスト環境（イメージ）

（１）噴射距離測定

無風のビニールハウス内にて、すべての試料について、噴射孔の位置を地面から 1.0 m の高さに固定し、試料を垂直に立てた状態で内容液の噴出が停止するまで連続噴射した際に内容液が到達した最も遠い地点までの距離（以下「噴射距離」という。）を横方向からの目視により測定しました。

目視による測定は、床面、側面に設置したメジャー及び 1 m 間隔で設置した LED ライトを目安に 0.5 m 単位で行いました。測定距離の上限は 10 m とし、10 m に達した場合は、10 m 以上として記録しました。各製品で 3 試料測定を行い、得られた測定結果のうち最大値および最小値を記録しました。

（２）噴射時間測定

噴射距離測定と同時に、噴射開始から内容液の噴出が停止するまでの時間（秒）を測定しました。

得られた測定結果について小数点以下を四捨五入し、最大値及び最小値を記録しました。

（３）噴射パターン確認

噴射距離測定と同時に、噴射された内容液の状態を目視により確認し、以下の３つに分類して記録しました。

霧状	細かい粒子が広がりながら飛び、雲のように見えたもの（図14）。
棒状	液流が直線的に飛び、棒のように見えたもの（図15）。
霧棒混在	霧状と棒状の中間。細かい粒子の広がりや直線的な液流の双方が確認できたもの。



図14 霧状（イメージ）



図15 棒状（イメージ）

（４）内容量測定

電子天秤を用いて噴射距離測定前後のクマ撃退スプレーの製品全体の質量（g）を測定し、その差から内容量を算出しました。

得られた測定結果について小数点以下を四捨五入し、記録しました。

（５）表示及び構造調査

製品本体や取扱説明書に記載された表示から有効成分を確認したほか、製品本体の目視により噴射機構（アクチュエーター）、安全装置や専用携行用ケースの有無を確認し、分類しました。